利根川流域の自然環境変動の視点から見た河道変遷

利根川流域の近世河川環境を中心に

利根川流域の自然環境変動の視点から見た河道変遷　(2009 槁本直子)

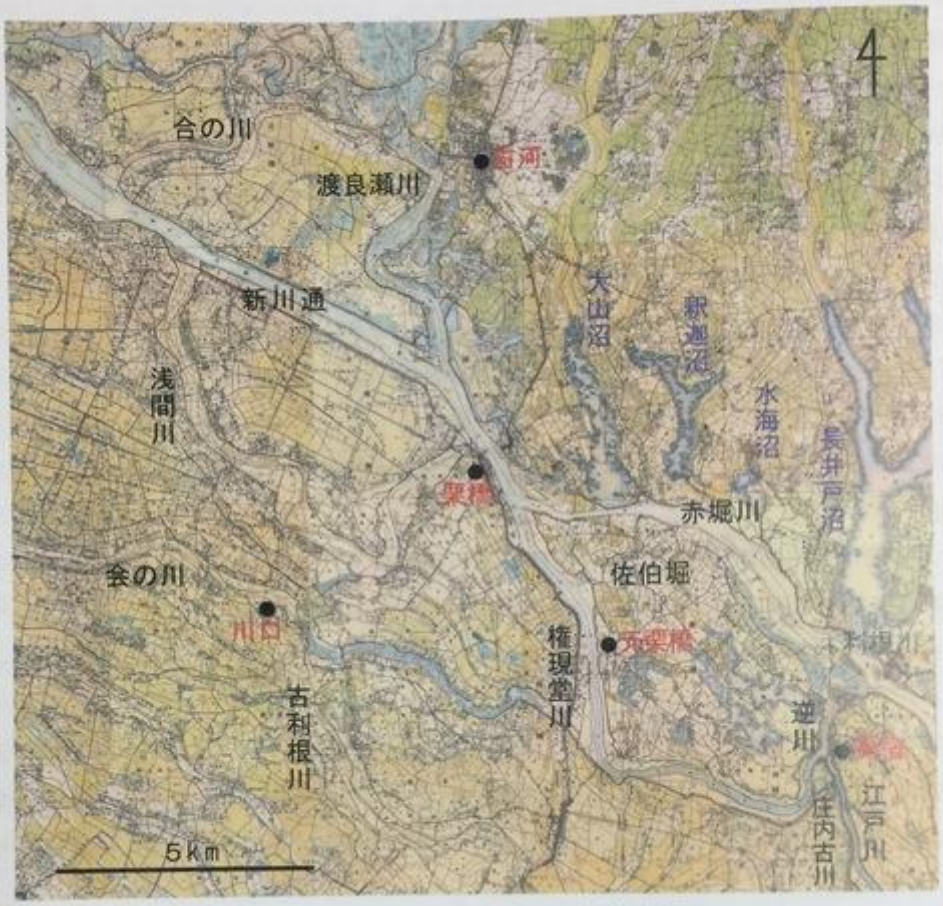


図 1-1　1880 年代の迅速測図にみる利根川の改変と旧河道の位置

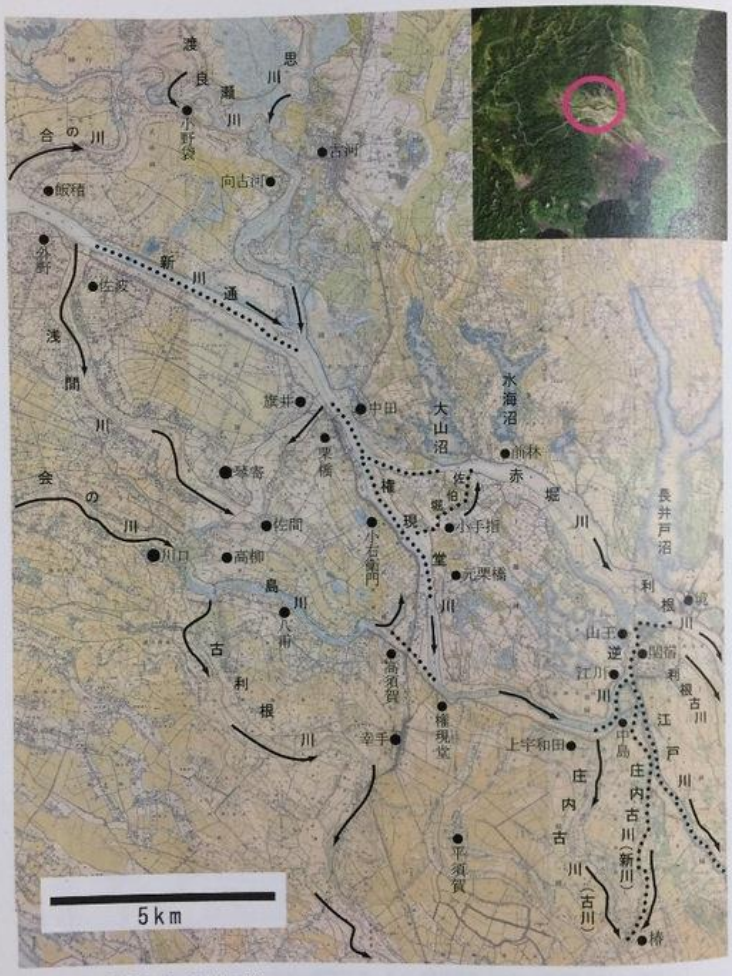
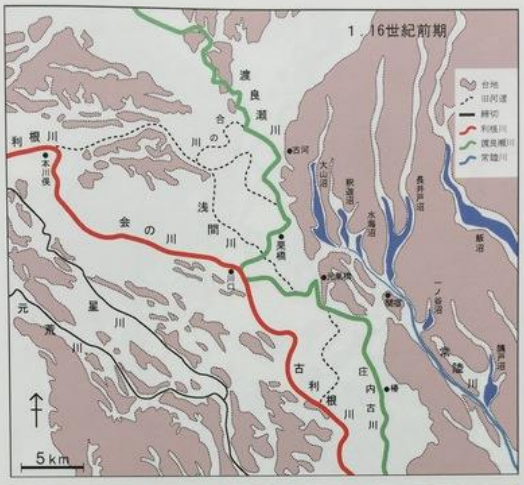
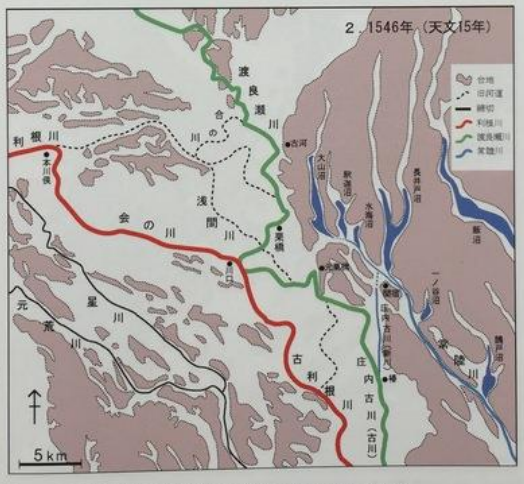


図 4-2　迅速測図にみえる旧河道
（迅速測図の合成上に旧河道を補筆した。点線は開削部、橋本 2009）

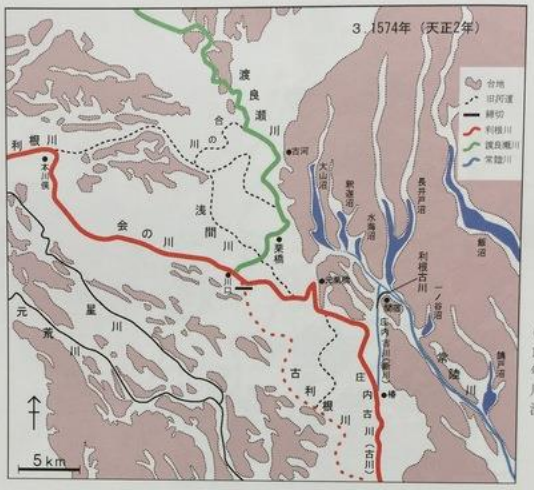


(a)
16 世紀前期の河道の改変以前の流路図

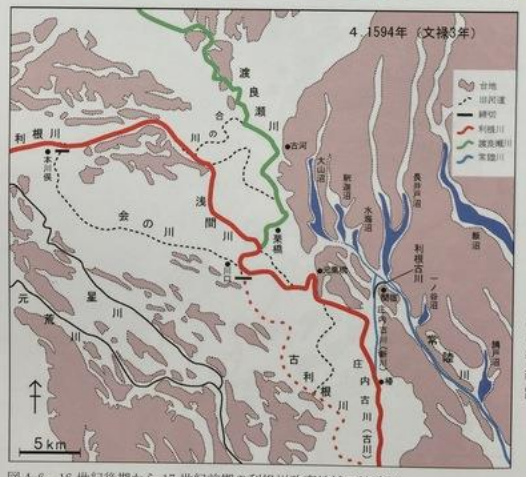


(b)
1546（天文15）年の庄内古川（新川）開削時の流路図

図 4-6　16 世紀後期から 17 世紀前期の利根川改変地域の流路図
（大熊 1981 に旧河道・地名を橋本が補筆した）



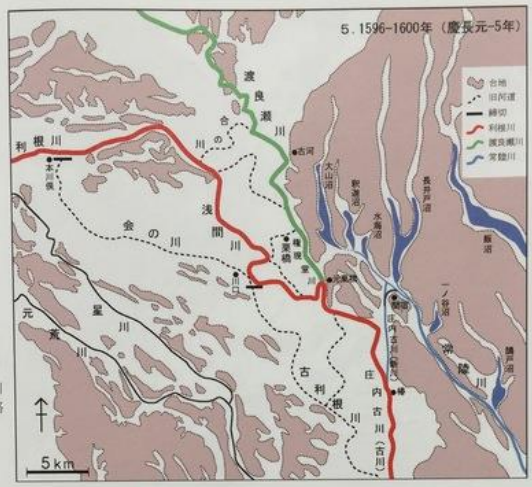
(c)
1574（天正2）年の古利根川締切時の流路図



(d)
1594（文禄3）年の会の川締切時の流路図

図 4-6　16 世紀後期から 17 世紀前期の利根川改変地域の流路図
（大熊 1981 に旧河道・地名を橋本が補筆した）

(e)
1596 ～ 1600
(慶長元～ 5)
年の権現堂川
開削時の流路
図



(f)
1621（元和 7）
年の新川通・
赤堀川一番
堀開削時の
流路図

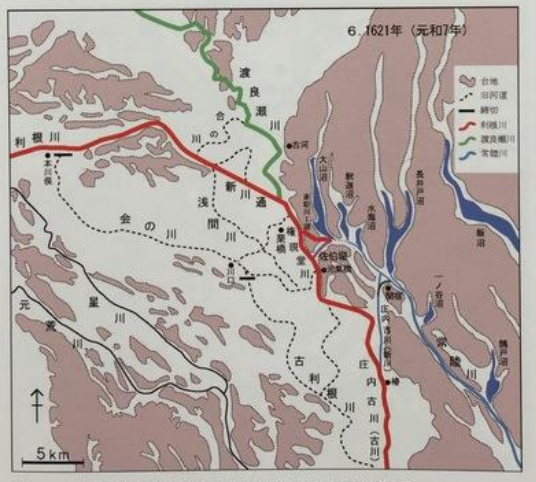
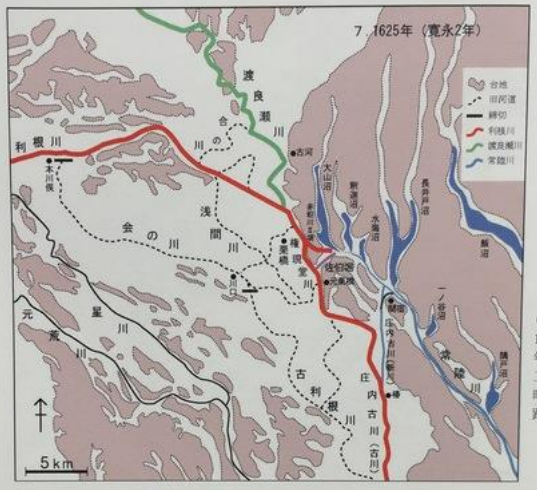
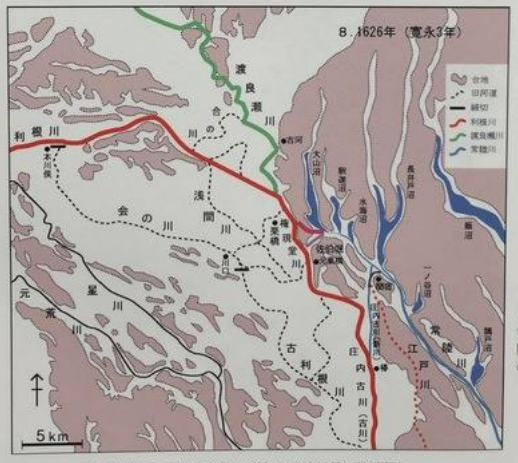


図 4-6　16 世紀後期から 17 世紀前期の利根川改変地域の流路図
（大熊 1981 に旧河道・地名を橋本が補筆した）

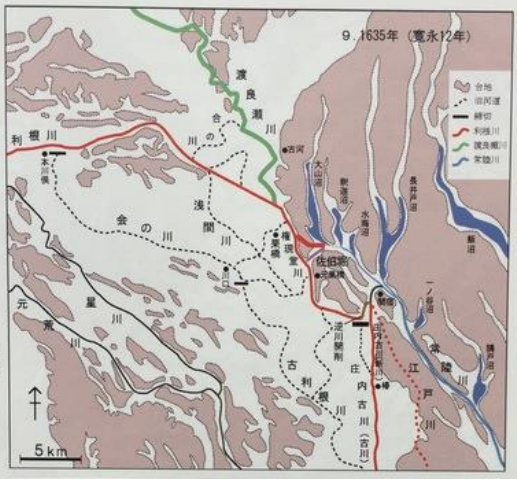


(g)
1625（寛永 2）年の赤堀川二番堀拡幅時の河道流路図

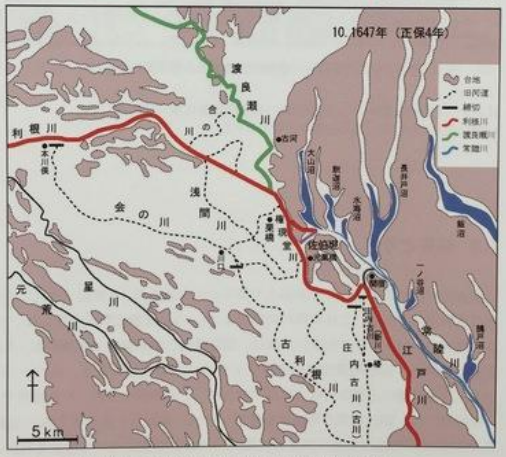


(h)
1626（寛永 3）年の江戸川開削開始時の河道図

図 4-6　16 世紀後期から 17 世紀前期の利根川改変地域の流路図
（大熊 1981 に旧河道・地名を橋本が補筆した）

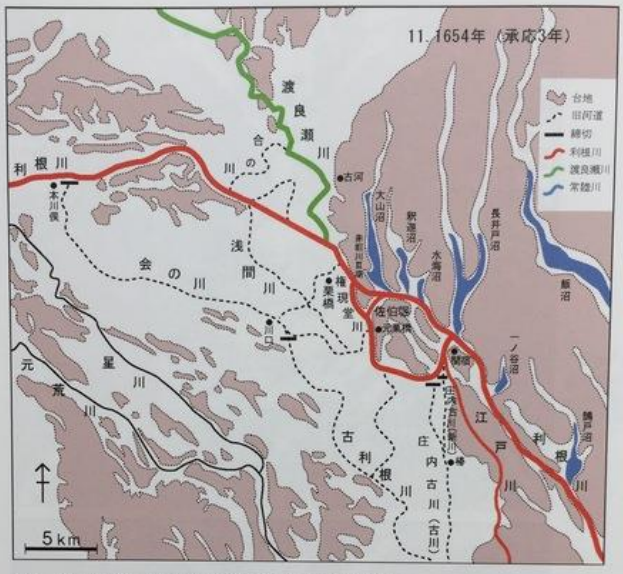


(i)
1635（寛永12）年逆川開削時の河道図



(j)
1647（正保4）年の江戸川完全通水時の河道図

図4-6　16世紀後期から17世紀前期の利根川改変地域の流路図
（大熊1981に旧河道・地名を橋本が補筆した）



(k) 1654（承応3）年の赤堀川3番堀完全通水時の河道図

図4-6 16世紀後期から17世紀前期の利根川改変地域の流路図
（大熊1981に旧河道・地名を橋本が補筆した）

4.3 結果と考察

利根川が、自然河道として史料上で明らかになるのは、8世紀（古代）の合の川で、下流は古利根川である。これ以降の利根川については、文献史料が存在しないこともあって、不明な点が多い。中世の利根川本流は、妻沼低地、加須低地で変遷があったことが推定できる。文献上、再び河道変遷が追跡できるのは、16世紀である。会の川が利根川本流となると、渡良瀬川と利根川は、川口（加須市）と高柳間で合流したと推定できる。

本研究では、既往研究の問題点を整理しつつ、新出した近世古文書や文献の考察から、16世紀以降の利根川本流と関連した諸河川の改変時期について分析を行い、以下の結論

を得た。

1）1546（天文15）年：庄内古川（新川）が開削される。

2）1574（天正2）年：古利根川が締め切られる。

この頃までに、関宿の東にあった利根古川が常陸川へ通じる。

3）1594（文禄3）年：会の川が締め切られ、利根川の本流は浅間川となる

4）1596（慶長元）年：古利根川が完全に締め切られる。

1596-1600（慶長元-5）年：中田・栗橋－小右衛門間に権現堂川が開削される。

5）1621（元和7）年:新川通が開削される。赤堀川一番堀、佐伯堀が同時に開削される。

6）1625（寛永2）年：赤堀川の二番堀が開削される。

7）1626（寛永3）年：江戸川の開削が開始される。

8）1635（寛永12）年：庄内古川の古川が締め切られる。

逆川が開削され、庄内古川の新川は江戸川が完全に通水するまでの利根川本流となる。

9）1647（正保4）年：江戸川が完全に通水する。庄内古川の新川が締め切られる。

10）1654（承応3）年：赤堀川の三番堀が完全に通水して、新川通―赤堀川が利根川本流となる。

以上の予察で問題が残るのは、庄内古川（古川）が締め切られた時期と佐伯堀・逆川の関係である。庄内古川（古川）の締切が1618（元和4）年で、逆川の開削が1635（寛永12）年とすると、この間の利根川本流は、権現堂川から赤堀川一番掘に向けた佐伯堀のみとなる。しかし、利根川本流が佐伯堀のみで流下したとは現実問題としてそれは考えにくい。やはり逆川が通水可能となるまでは、庄内古川（古川）を流下していたとみるのが妥当であり、庄内古川（古川）の完全な締切は元和年間ではなく、寛永年間後半とした。

関東河川水運史研究について概括

利根川改修工事の推移

から、次の結果が得られた（表 4-2）（図 4-6）。

表4-2　利根川諸河道に関する既往研究の検討と新資料を加えた新見解

西暦	和暦	年	会の川	新川通	赤堀川	逆川	権現堂川	佐伯堀	江戸川	庄内古川	利根古川	古利根川
1532	天文	元								新川開削：茂木家 長本家	開削：横田家	
1546		15										
1554		23										
1574	天正	2									1573年前中利根に統通	締切：雲樹寺
1576		4					築堤：『新編』					
1592	文禄	元	締切：清宮									
1594		3	締切：『新編』									
1595		4										
1596	慶長	元					開削：樋本					締切：小島家
1621	元和	7		開削：河田・根岸 吉田・栗原 大熊	一番堀：島上・清宮 河田・栗原 大熊		開削：船橋	開削：船橋				
1625	寛永	2		拡幅：河田	二番堀：島上・清宮							
1626		3							開削：茂木家			
1634		11							開削：金田家 松本家			
1635		12			二番堀：根岸・大熊	開削：船橋			開削：船橋・吉田			
1640		17							開削：小流寺 芝田家			
									開削：根岸			
1641		18				開削：河田・根岸 大熊 改修：吉田・栗原	開削：河田・根岸 大熊 改修：吉田・栗原	開削：河田・吉田 栗原・大熊	開削：清宮・大熊 施工：船橋	開削：下宰和田より東		
1642		19		開削：『新編』 拡幅：河田・根岸 栗原・大熊								
1647	正保	4							通水：茂木家			
1654	承応	3			三番堀：島上・清宮 河田・根岸 吉田・栗原 大熊							
1665	寛文	5				開削：清宮						

凡例：↑開削年次　新資料　本研究での年代決定　橋本見解

1546 年代　新川開削

1574 年　古利根川締め切り

1594 年　会の川締め切り　本流は浅間川に

1596～　中田・栗橋、権現堂川開削

1621 年　新川通が開削される　　赤堀川一番掘り開削

1625 年　赤堀川二番掘り開削

1626 年～江戸川開削開始

1635 年　庄内古川の古川締め切り

1647 年　江戸川通水　庄内古川の新川が締め切られる

1654 年　赤堀川三番掘り、通水、新川通り-赤堀川が利根川本流となる。

洪水、新田耕地確保のため河道の東流を図って行った。

1700 年代から　　年貢米の回漕、産品流通の合理化、水運事業に伴う改修工事、および灌漑整備
幕府の命を受けた伊奈忠次、忠治、忠克親子による東流事業(赤堀川開削事業)

江戸時代初期の河川改修工事とその意義（kubota　技報）

江戸時代直前から初期にかけて利根川に加えられた河川改修工事は、総称して利根川東遷事業と呼ばれている
そしてこの東遷事業は、従来、徳川家康が江戸入府（1590 年）以来、当初から利根川の流域を変えて常陸川に導き、銚子で鹿島灘に落とす構想を描いたと言われ、文禄 3 年（1594 年）の会の川締切をその端緒とし、６０年の歳月をかけて承応 3 年（1654 年）利根川水系と常陸川水系を結ぶ赤堀川の開削をもってその構想を達成した、とされる。
その目的は次の 4 つ
①　江戸を利根川による水害から守る
②　埼玉平野から利根川を遠ざけて、その開発を進める
③　舟運を開いて関東平野はもちろん東北と関東との経済交流をはかる
④　東北の雄藩伊達に対する防備として、利根川をして江戸城の一大外壕とする
そして、この東遷事業によって、常陸川水系下流、すなわち現在の刀根川下流の水害が激化した。
　これら長期構想についてよって進められた東遷事業を吟味する。
＜会の川締切り＞　文禄 3 年　（1594 年）
＜小名木川の開削＞　慶長年代（1596 年～1614 年）
＜名洗掘割の起工＞　慶長年代（1596 年～1614 年）
＜新川通と赤堀川の開削＞　元和 7 年（1621 年）～寛永年代（1624 年～1643 年）
＜浅間川の高柳地点での締切り＞
＜鬼怒川・小貝川の分離ー大木丘陵の開削ー＞寛永 6 年（1629 年）
＜江戸川上流部の開削＞ー寛永 18 年（1641 年）－

＜利根川東遷事業の再評価＞
いままでに触れたもの以外に,
寛永年代初期の常陸川末流の改修,
寛永 6 年の荒川の瀬替,

佐伯渠の開削などあるが,
これらの河川改修工事および農業用水の開発に関する直接の指導は，関東郡代伊奈備前守忠次以下三代の伊奈一族が行っており，備前堀・備前提・伊奈村など一族にちなんだ名称が残されている．この一族の墓は鴻巣町勝願寺に安置されている．
従来，この 60 年間の諸工事で，利根川の幹川が赤堀川から常陸川に移り，利根川東遷事業が完成したとするのが大方の意見であった．
たとえば，**栗原良輔**は，「承応３年に赤堀川の水深を増加させたので，始めて洪水の多量が常陸川筋に排疏出来るようになった．
故に利根川の流路は，文禄三年以来次第次第に東方へ押し付けられ，遂に其の流路が鬼怒川の流路を奪って東流し，曽ては江戸湾を吐口としたものが一転，鹿島灘に注ぐと言ふ，一大変遷を示したものである」と述べている．
これに対し，はじめて異論を唱えたのは**小出博**であり，赤堀川は，利根川の洪水を呑みこむにはあまりに川幅が狭く緩勾配であることを指摘している．
小出のこの異論は，従来の神話化されていた利根川東遷の評価に関し，基本的な再検討をせまるものであり，きわめて意義深い．
この小出の見解をさらに一歩すすめるならば,
幕府には，洪水防禦の意味で利根川を東遷させる構想はなかったと考えられる．その論拠は，江戸川開削や鬼怒川の大木丘陵開削にみられる
大土工を敢行しておきながら，赤堀川を 10 間幅のままで拡幅しようとしなかったことにある．

≪宝暦治水調査報告≫
この赤堀川に対する幕府の見解が端的に表われているのは，宝暦年代（1751～1763 年）の宝暦治水調査報告である．この調査は，利根川と会の川自然堤防に囲まれている羽生領の住民が，その唯一の排水河川である島川への権現堂川からの逆流に苦しみ，水害軽減を嘆願して行われたものである．
その調査報告によれば，赤堀川を拡幅した場合は上利根川が渇水し，権現堂川の疏通をよくした場合，中・下利根川（旧常陸川）が渇水し，どちらも舟運を害するため，現状を維持する以外に方法がないと結論されている．
この調査報告から，逆に赤堀川開削の目的を類推すれば,
平水の涸渇している常陸川に吃水の深い大型の船を舟航させ，かつ，上利根川や江戸川の舟運を害さない程度に，利根川の水を引き入れることにあったと言える．
すなわち，利根川東遷事業の目的を舟運に限って見た場合,
元和７年の新川通・赤堀川の開削が第一段階,
寛永６年の鬼怒川の付替が第２段階,
寛永年代の浅間川締切りが第３段階,

そして承応３年の赤堀川の増掘がその完成段階と位置づけられる.

文献史学からは、利根川東遷は結果であって目的ではなかったとする、見解がある。
また河川工学でも東遷の完成を近代とする説もある。
文献史学において、利根川の河道問題に関心がもたれたのは中世史である。内陸水上交通の観点から、関宿城周辺の利根川と常陸川の二大水系が連絡してたか否かについては未だ見解は二分している。
近世史が利根川の河道改変問題に関心を示すのは 1980 年代以降である。
利根川の河道改変に関わる諸河川は、会の川の締切・新川通の開削の時期以外、各研究者・文献によって解釈が異なる。
とくに利根川本流の改変に大きな意味を持つ権現堂川・逆川・佐伯堀に開削については、資料も少なく統一した見解は得られていない。
また、かつての利根川本流であった古利根川・庄内古川の河道変遷についての考察はほとんどされていない。
この理由は、利根川研究の視点は、「利根川東遷」説に立脚した利根川本流の改変時期そのものにあったことがあげられる。
したがって、利根川本流の改変に連動した諸河川の改変時期と流域全体に及ぶ段階的な河道復元作業は未だ不十分と言われる。